

吉備国際大学研究紀要
 (人文・社会科学系)
 増刊号, 153-162, 2017

童謡・唱歌、子どもの歌を再考する —風景をキーワードに—

上田 豊

Reconsideration about Japanese Children's Songs — From keyword of FUKUI(Japanese country scene) —

Yutaka Ueda

Abstract

This paper tried to consider the factors at prospective Japanese children's songs from keyword FUKUI (Japanese country scene).

In many prospective Japanese children's songs, daily scene and life have a lot of meanings as a tradition. The experiences to sing these songs made up the feeling of nostalgia. These kind of Japanese Children's songs like "hurusato" "akatonno" "yuuyakekoyake" "oborodukiyo" "chiisaiakimitsuketa" "makkanaaki" and other songs related to the experience of making up the feeling of nostalgia.

Key words : Children's Song Tradition FUKUI(Japanese Country Scene) life Nostalgia

キーワード : 唱歌・童謡 歌い継ぐ 風景 いのち なつかしさ

はじめに

筆者は、所属する全国大学音楽教育学会の創立25周年記念事業の『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌—唱歌童謡140年の歩み』¹⁾の編纂に編集委員長として取り組んだ。収録曲は、153曲である。編纂に当たってのコンセプトは五つあり、それらの一つに「わが国

の音楽所産である唱歌・童謡(小学校歌唱共通教材全24曲を含む)、その後も誕生した多くの歌で、これからも歌い継がれると思われる歌」であった。

本稿は、同書のタイトルにある「歌い継ぐ」「歌い継がれる歌」とはどのような歌か。歌い継ぎ、歌い継がれてきた歌は、どのような点で人の心をとらえたのか、

その要因について、「風景」をキーワードに、考察を試みるものである。

第1章では、このテーマに係る先行研究について調査し、続いて『日本のうたふるさとのうた100曲』²⁾や現在出版されている大人向けの合唱曲集から、歌い継がれている歌の現状を把握する。第2章では、長田弘氏の「風景」、内山節氏の「いのち」から、歌い次ぐ歌について考察する。そして、第3章において、「なつかしき」をキーワードに大人が唱歌・童謡を歌う意味についての考察から、「歌い継ぐ」「歌い継がれる歌」とは、どのようなものであるかを導いていく。

1. 歌い継がれている歌の現状

(1) 先行研究

今回調査した結果では、「歌い継ぐ」「歌い継がれる歌」という視点からの研究は、ほとんど見つかることができなかつた。多くは、唱歌への批判と童謡への賛美のものであつた。それらには、山住の『子どもの歌を語る ―唱歌と童謡―』³⁾、安田の『「唱歌」という奇跡十二の物語 讃美歌と近代の間で』⁴⁾などが広く知られている。

筆者が所属し、前掲書を出版した全国大学音楽教育学会の研究紀要では、唱歌・童謡に関する論文は、山崎の「幼児の歌唱教材についての一考察 ―歌唱教材の分析・検討を通して―」⁵⁾、齊木の『「児童文化」にみる子どもの音楽」⁶⁾、桶谷の「童謡と唱歌の本質とその相違について」⁷⁾、「島崎藤村と高野辰之に見る歌のふるさと」⁸⁾、羽根田の「にほんのうたをめぐって」⁹⁾、藤井の「大正童謡運動の国際的展開に関する一考察―朝鮮とアメリカの場合―」¹⁰⁾の6編であつた。

以上のなかで、唱歌・童謡を作品の視点から論じているのは、桶谷と羽根田のものであつた。桶谷は、「今日、唱歌が不当に評価を下げているように思うのが残念でならない」¹¹⁾と唱歌への再考を促している。また、羽根田は、唱歌・童謡の歌い方について「(マスコミの

曲は)リズムやテンポが優先されて動的な行動が突出する傾向にある現状に対して、童謡や唱歌は、詩の内容、つまり言葉が理解されてメロディが存在している」¹²⁾と演奏の心得の大切さを訴えている。

本研究は、桶谷の童謡・唱歌の価値を見直すという主張と、羽田の表現における、マスコミの曲のリズムやテンポが優先されて動的な行動が突出する傾向にある現状にあつて、「詩の内容」の理解が求められるという主張を支持し、唱歌・童謡の価値を「風景」をキーワードに考察しようとするものである。

(2) 歌い継がれている歌の現状

ここでは、1991年に出版された『日本のうたふるさとのうた100曲』を中心に、現在出版されている合唱曲集から、歌い継がれている歌の現状を探っていく。

1) 日本のうたふるさとのうた100曲

『日本のうたふるさとのうた100曲』編纂の趣旨は、「急激な都市化や国際化につれて、日本人の心から、そしてふるさとから忘れ去られようとしている(中略)そうした忘れ去られつつある『うた』を日本全国の人々とともに掘り起こし、次の世代に伝える文化遺産として集大成し、記録をとどめようとするもの」¹³⁾である。調査は、この趣旨のもと、明治・大正・昭和の歌から次世代へ残したい歌をテーマにそつた歌のなから一曲選び、はがきなどで投票する方法で行われた。結果は、応募総数657,323通、応募曲の総数は5,141曲にのぼつた。

募集は、(社)日本作詞家協会、(社)日本作曲家協会、(社)日本音楽著作権協会、日本放送協会など14団体による全国実行委員会が組織され、日本文芸家協会理事長の三浦朱門氏を委員長に、平成元年3月1日から5月31日までの期間に実施された。具体的な集計は、各都道府県に置かれた地域実行委員会が担当し、自地域のベスト100曲を選んだ。さらに、全国実行委員会がそれらを基に全国版として集計した。最終決定は、諮問委員会(国語学者の金田一春彦、作曲家の三枝成章等

5人で構成)によって行われた。

結果は、各県上位3曲が、非常に顕著な傾向を示していた。それは、赤蜻蛉が43県、故郷が42県と、大多数の県で支持を得ていたこと、次が夕焼小焼12県、朧月夜6県、みかんの花咲く丘5県、荒城の月2県の順となっていたことである。

この顕著な傾向について考察することは、本研究に大きな示唆を与えてくれることを期待させた。

2) 大人向けの合唱曲集から

ここでは合唱編曲集を取り上げた。手元にある16の合唱曲集中、9曲集が唱歌・童謡を選曲していた¹⁴⁾。これらは、編集の意図に沿って選曲されたものであり、掲載されている曲は、大人が歌いたい歌としての要望からのものと考えることができる。また、「…唱歌メドレー」「…唱歌のひびき」のように「唱歌」をタイトルにした企画もあった。従って、選曲された曲は、唱歌優位となっている。故郷が5曲集、紅葉が4曲集、朧月夜と冬の夜が2曲集である。童謡は、わずか4曲であるが、「赤とんぼ」は2曲集で選曲されていた。

目を引いたのは、次のふたつの曲集である。『楽しい合唱名曲集 合唱コンクールで唄いたいうた』(シンコーミュージック・エンタテイメント出版 2012年)は、小・中学、高校生向けと思われる曲集でありながら、「手紙～拝啓、十五の君へ～」(アンジェラ・アキ作詞・作曲)、「歩いていこう」(水野良樹作詞・作曲)など若者が好む曲目ばかりの中に、「ふるさと」(高野辰之作詞、岡野貞一作曲)を集録していたのである。同じく、授業の副本と思われる『MY SONG 4訂版』(教育芸術社 2012年)にも「ふるさと」が集録されていた。「ふるさと」は、ここでも特別な扱いが感じられる。

3) 赤蜻蛉と故郷

『日本のうたふるさとのうた100曲』では、赤蜻蛉と故郷が突出していた。また、大人向けの合唱曲集においても、故郷、紅葉、赤とんぼが複数の曲集で選曲さ

れていた。

赤蜻蛉は、童話雑誌「樗の実」1921(大正)年8月号に、第一と第二連が発表された。現在の形になったのは、その後第一詩集『真珠島』(同年 アルス)に収録されてからである¹⁵⁾。この曲は三木露風作詞・山田耕筰作曲で、歌詞は次の通りである。

赤蜻蛉

- ① 夕焼、小焼けの あかとんぼ
負われて見たのは いつの日か。
- ② 山の畑の 桑の実を
小籠に摘んだは まぼろしか。
- ③ 十五で姐やは 嫁に行き
お里のたよりも 絶えはてた。
- ④ 夕やけ小やけの 赤とんぼ
とまっているよ 竿の先。

四連は、起承転結の構成をとっている。そして、「お里の」「とまっているよ」のように、幼児語や呼びかけの表現が使われ、童謡らしさを感じさせ、幼少の頃の思い出を懐かしむ心情を豊かに表現している。

故郷は、『尋常小学校唱歌』(1914〈大正〉3年刊行)に収録された文部省唱歌である。この曲は高野辰之作詞・岡野貞一作曲で、歌詞は次の通りである。

故郷

- ① 兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川、夢は今も
めぐりて、忘れがたき故郷。
- ② 如何にいます父母、恙なしや友がき、雨に風につけても、思いいづる故郷。
- ③ ころざしをはたして、いつの日にか帰らん、
山はあおき故郷。水は清き故郷。

文語体で書かれ、三連は起承結で、「転」がない構成と考えられる。この歌は、児童が歌う場合は、「ころざしをはたして、いつの日にか帰らん」の部分に将来の自分の姿を願う立身出世を志す歌となり、いかにも唱歌にふさわしい歌といえる。

しかし、大人が歌う場合には、「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」「如何にいます父母、恙なしや友がき」

「山はあおき故郷。水は清き故郷」が望郷の念を掻き立て、それらは「ころろざしをはたして、いつの日にか帰らん」という人生の目標を達成するための力となるであろう。

2. 歌い継がれる歌とは

『日本のうたふるさとのうた』において、突出して支持を得たこれら二つの歌に共通するのは、幼少期に過ごした「風景」とそれを「懐かしむ心情」である。次にこれらについて考察する。

(1) 風景

唱歌に日本の風景がうたわれているのは、そもそも唱歌は、花鳥風月や物語の主人公を題材とする教訓的な歌として作られたものなので当然といえる。しかし、注目すべきは、それらが童謡運動の人々から強い批判を受けたにもかかわらず、今日多くの支持を得ていることである。その理由はどこにあるのであろうか。

長田弘は、私たちにとって風景がいかに深い関りをもったものであるかを切々と述べている。少し長いが、長田の主張を引用する。

わたしたちは風景のなかで生き、そして暮らしています。景勝・絶景といった特別な風景ではなく、ここで言う風景というのは、わたしたちの日常の風景のことです。(略) 自分がそのなかで育てられた風景というものに助けられてわたしたちの経験、あるいは記憶はつくられています。わたしたちの文化もそうです。風景のない文化はありませんし、芸術というものをつねにささえてきたものは、風景を深く見つめる姿勢です。(略) 風景のなかに在る自分というところから視野を確かにしてゆくことが、いまは切実に求められなければならないのだと思います¹⁶⁾。

筆者は、長田の主張に同感する。それは、人間をは

じめすべての生き物は、私たちをとり囲む豊かな自然のなかで共存しているからである。そして、内山節の「いのち」に対する考え方は、この長田の主張を裏付けるものである。

(2) いのち 内山節(たかし) 哲学からの考察

内山節は、現代社会では、「いのち」は個的なものとしてとらえられているという。内山はこの考え方について、「自己にとっては自分の『いのち』が絶対的のものになっている。自己の『いのち』を頂点においた『いのち』のヒエラルキーが人間の数だけ発生しているといってもよい。だから自己の『いのち』からみれば、顧みる必要のない他者の『いのち』も、関心をもつ必要のない『いのち』も発生する」と、個的な「いのち」の問題点を指摘している¹⁷⁾。

しかし、内山は「いのち」は個的なものではなく、生きている場のなかに成立しているという。彼は、「いのち」が自分のいのちは自分の体の中にあって心臓を動かし、血液を循環させるという、機械的な機能と捉えるならば、「いのち」は個的なものといえるという。しかし、彼は「いのち」は、生活している場のなかにあるという。「いのち」は、それを成立させる場があっではじめて存在でき、その場を作っているのが、関係であるという。

内山は、この考え方の理解のために、船が難破し無人島にたった一人漂流した話を例示している。少し長いが引用する。

このケースでは、私はどこに「いのち」が存在する場所をもっていたのだろうか。それは 第一にこの島の自然との関係のなかに、である。島で水を得、食料を調達し、草木で小屋をつくり、植物の繊維などで簡単な衣服をつくっていた、という意味でも島の自然が私の「いのち」を存在させる場所を提供していた。それだけではなく、次第に私は島の草花を楽しみ、鳥の声や動物たちの気

配を楽しむようになって、それらのことがここで暮らしを成り立たせていたかもしれない。とするとそのような意味でも島の自然が私の「いのち」のありかを支えていたことになる¹⁸⁾。

つまり、内山の主張によれば、「いのち」は人が生活している場との関係性の中に存在するということになる。人が生活している場とは、生活の「風景」といえる。

(3) うたから「風景」がなくなっていく

長田と内山の考え方は、人は今を生きている場所である「風景」とのかかわりこそが、「いのち」を生きることであり、気付かせてくれる。

しかし、現代の状況はどうであろうか。長田は、現代はその大切な風景が軽視されている、否消失していると嘆く。そして、そればかりか「若い世代のはやり歌に、(略) 風景は消失し、歌の世界にのこったのはとめどない感情です」¹⁹⁾と、風景に代わって感情の吐露が重きをなすようになったという。

風景を見るということは、遠くを見ること、全体を見渡すということである。長田は、この全体を見渡すという視点の欠落を問題視している。その結果、「何事もクローズアップで見て、クローズアップで考えるということが、あまりにも多いことに気づきます。クローズアップは部分を拡大して、全体を斥けます。見えないものが見えるようになった代わりに、たぶんそのぶんわたしたちは、見えているものをちゃんと見なくなった」²⁰⁾と嘆いている。

上記の長田の主張は、大人のはやり歌についての指摘であるが、筆者は子どもの歌の世界にも当てはまると感じている。一例を挙げよう。「そうだ うれしいんだ いきるよろこび / たとえ むねのきずが いたんでも」、これは子どもたちが大好きなアンパンマンのマーチである。アニメーションの主人公のキャラクターを歌ったものなので、その一体感を考えると多少の違和感はあるかもしれないが、筆者は、もっ

と子どもらしい表現の方向性も取れたのではないかと思う。

唱歌はその誕生の経緯から「花鳥風月」という日本の風景を基調としている。童謡には子どもの姿がうたわれているが、「赤蜻蛉」のように、やはり「風景」のかなで描写される傾向をもっている。しかし、時代が下ると、「感情」や「願望」が主となり、「風景」がうたわれていても従の役割のうたが多くなってきた。例えば、「ホ!ホ!ホ!」(伊藤アキラ作詞/越部信義作曲)、「そうだったらいいのにな」(井出隆夫作詞/福田和子作曲)、「僕のミックスジュース」(五味太郎作詞/渋谷 毅作曲) 等である。

3. 大人が唱歌・童謡を歌う意味

(1) 唱歌とは、童謡とは

ここで、唱歌、童謡がどのようなものかを確認しておきたい。それらは、次のように定義されている。

唱歌とは：元来が初等義務教育における〈教材〉として作られたもの、子どもに音楽的な感情を養うとともに、その域を超えて徳育と知育の役割を背負わされたもの²¹⁾。

童謡とは：文学者が自己の〈詩心〉と内包する〈童心〉との統一的表現をめざして書いた子ども向けの詩に、西洋音楽に立つ音楽家が曲をほどこして成ったもの²²⁾。

唱歌と童謡は、どちらも大人の手によってつくられたものである。ということは、どちらも大人が思うところの子どもの歌ということである。子どもにうたわせた歌ではあるが、大人も共感しているものである。それは、日本のうたふるさとのうた100曲、や合唱曲集に選ばれていることから、理解できる。つまり、童謡・唱歌は、子どもの時に歌うだけではなく、大人になっても歌うということである。

桶谷 (1990年) は、大人が童謡を歌うことについて、「私 (筆者) にとって『童謡』とは、子どもたちが童心

をうたう歌であると同時に、大人が童心に立ち返ってうたう歌でもあったのである」と述べている²³⁾。

この二度歌う意味はどこにあるのであろうか。それは、前述した「風景」とそれを「懐かしむ心情」と思われる。次に「なつかしさ」について考察する。

(2) なつかしさ

「なつかしさ」は誰もがもっている感情である。骨董収集、古民家再生など、現代はいろいろな場面で古いものに価値が求められている。

1) なつかしさとは何か

なつかしさは、喜び、悲しみといった単一のものではなく、複数の要素が係ってできる複合的な感情であるという。それは、過去に何度も見たりおこなったりした、多くの体験した事柄があり、その後長い空白期間を経て、何らかのきっかけにより、過去に体験した事柄が想起されるというものである。したがって、なつかしいという感情状態に自分や他の人があることを理解するには、旧友と会った、昔聴いた曲を聴いたという体験が必要となるという。

楠見 (2014) は、なつかしさはポジティブな感情かネガティブな感情かについて考察した²⁴⁾。そして、「なつかしさ」は社会学者デーヴィスの引用から、「(なつかしさは) 過去の美しさ、楽しさ、喜び、満足、幸福、愛などポジティブな感情」²⁵⁾であるという。しかし、「喪失感」「寂しさ」「後悔」など中程度のネガティブな感情も対応するが、「孤独」「悲しみ」など程度の高い感情は該当しないという²⁶⁾。

2) なつかしさを感じるものはどのようなものか

これについて、「風景」「出来事」「音楽」についての調査結果が報告されている。楠見等は、大学生451人を対象に、①なつかしさを感じる風景、②出来事、③音楽などについて調査を行った。結果は以下の通りである²⁷⁾。

① なつかしさを感じる風景：

第一は「小学校、中学校、学校、校舎、教室、グラウンド・校庭・高校、通学路」などにかかわる学校の風景、合わせて「地元、実家」など故郷にかかわる風景であった。そして、時間は「夕日・夕焼け」などが多かった。

第二は「田んぼ、山、田舎、自然、畑、田園風景、海、川」など、田舎の風景や祖父母の出現頻度が多いという結果であった。

② なつかしさを感じる出来事：

第一は、学校関連で「小学校」「中学校」「高校」「母校」「通学路」といった毎日通い、「部活」「運動会・体育祭」など毎日練習したこと、あるいは「卒業式」「入学式」「文化祭」などの印象的な出来事。

第二は、かつて何度もした「子ども」の「遊び」や「ブランコ」を「公園」で見ることとなつかしさを引き起こす要因となった。

③ なつかしさを感じる音楽：

第一は「小学校」「中学校・中学生」のときに歌っていた曲、「校歌」「童謡」「卒業式」「授業」「ふるさと」など学校にかかわる曲。

第二は、「過去のヒット曲」「主題曲」「アニメ」「ドラマ」などテレビに関する曲名やアーティスト名が多かった。

そして、なつかしさの意義について、楠見は、「現実のつらい気分を忘れたり、過去のつらい記憶をポジティブに変化させ、幸せな気分をたかめたりする」、「自尊心や自己肯定感を高める」「人生の意味づけをおこなうことによって、『死への脅威』を緩和するという制御機能」、「孤独感を低減し、社会的絆の意識を高め、社会的サポートを高める」などの効果を挙げている²⁸⁾。

(3) 「風景」と「なつかしさ」をもつ歌

以上の考察から、歌い継がれる歌とは、「風景」と「なつかしさ」をもった歌ということになる。ここでは、この二つの要素を基にそのような歌について、考察を試

みる。

「夕焼小焼」「朧月夜」「ちいさい秋みつけた」「まっかな秋」など、これらはどれもなつかしさを感じさせる「田んぼ、山、田舎、自然、畑、田園風景、海、川」などの日本の「風景」と「夕日・夕焼け」という時間が歌われている。従って、これらがこれまでに多くの人々の支持を受け、歌い継がれてきた事実を再確認することができる。そして、今後も歌い継がれるであろう。

なつかしさをを感じる音楽に、卒業式にかかわる歌があった。『明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌 ―唱歌童謡140年の歩み』には、卒園のうたが「思い出のアルバム」「ありがとう・さようなら」「さよならぼくたちのようちえん（ほいくえん）」の三曲選ばれている。本稿のテーマから、これらについて考察する。「思い出のアルバム」（増子とし作詞、本多鉄磨作曲）は、1961（昭和36）年、『幼児のためのリズムカルプレー』（フレール館）のリズム遊びの1曲として発表された²⁹。

次は、「思い出のアルバム」の歌詞の一部である。

（園児） ぽかぽおにわで なかよくあそんだ きれ
いなはなも さいていた

（園児） むぎわらぼうしで みんなはだかんぼ お
ふねもみたよ すなやまも

（園児） どんぐりやまの ハイキングラララ あかい
はっぱも とんでいた

（園児） もみのきかざって メリークリスマス サン
タのおじいさん わらってた

（先生） もものおはなも きれいにさいて もうすぐ
みんなは いちねんせい

この歌は、先生（保護者）と園児の対話形式の曲である。先生の呼びかけに園児らがそれぞれの季節における出来事を答える。そして、出来事が具体的な遊びの風景として歌われている。

「ありがとう・さようなら」（井出隆夫作詞、福田和禾子作曲）は、1976（昭和51）年、NHKテレビ『みんなのうた』で発表され、全国広まった³⁰。

次は、「ありがとう さようなら」の歌詞の一部である。

（先生） なつのひざしにも ふゆのそらのしたで み
んなまぶしくかがやいていた

（先生） おもいでいきずがのこる あのつくえ だれ
がこんど すわるんだらう

（先生） あたらしいかぜに ゆめのつばさひろげて
ひとりひとりが とびたつとき

この歌も、先生と園児の対話形式の曲である。初めに園児らが友だちや園、先生にありがとうと歌い、それにこたえて先生が上記の言葉を歌う。しかし、それは具体的な保育の風景ではなく、「…かがやいていた」「…とびたつとき」のように漠然とした内容である。

「さよならぼくたちのほいくえん（ようちえん）」は、新沢としひこが保育園の卒園式のために作曲し、ピアニストの島筒秀夫が作曲し、現在は幼稚園でも歌われている。初めて発表された日時は特定できなかったが、新沢の生まれが1963年なので、平成になってからと思われる³¹。

次は、「さよならぼくたちのほいくえん（ようちえん）」の歌詞の1番と2番である。

たくさんのまいにちを ここですごしてきたね
なんどわらって なんどないて なんどかぜをひ
いて

たくさんのともだちと ここであそんできたね
どこではしって どこでころんで どこでけんか
をして

さよなら ぼくたちの ようちえん ぼくたちの
あそんだにわ

さくらははなびらふるころは ランドセルのいち
ねんせい

たくさんのまいにちを ここですごしてきたね
うれしいことも かなしことも きっとわすれな
い

たくさんのともだちと ここであそんできたね

みずあそびも ゆきだるまも ずっとわすれない
 さよなら ぼくたちの ようちえん ぼくたちの
 あそんだにわ
 このつぎあそびにくるころは ランドセルのいち
 ねんせい

この歌は、どのように歌われるのであろうか。いくつかの可能性が考えられる。①すべてを先生が歌う。②第一と第三連が先生、第二と第四が園児、第五連と六連は園児と先生。③第五連と第六連のみ園児で他は先生等。

現場の確認をしたく、YouTubeで検索した。今回の検索では、すべてを園児がうたっているものばかりであった³²⁾。しかし、筆者は園児が第一と三連を歌うことには違和感をおぼえる。園児らが「たくさんのともだちと ここであそんできたね」は少し不自然である。ここはやはり先生が園児に呼びかけるフレーズではないであろうか。第二・四連で園生活がうたわれるが、それらは保育の出来事ではなく、「…なんどわらって…」 「…どこではしって」のように感情や漠然とした行動である。

やはり、この歌は、先生からの別れのメッセージとして、先生が園児との別れの心情を白露しているように感じられる。

以上の考察から、卒園の歌として歌い継がれる要素をもっているのは、「思い出のアルバム」であるといえる。

第2章で、長田の世のはやり歌から「風景」がなくなり、風景に代わって感情の吐露が重きをなすようになったという嘆きを指摘した。上記三つの卒園の歌を見ると、この流れは子どもの歌にもあてはまる。

結び

以上の考察から、歌い継ぎ、歌い継がれる歌は、日々の生活で接する「風景」とその風景のなかで育った「生き様」であり、その風景は「いのち」が生かされた関係性をもつ場所である。そして、それらの体験した事柄を懐かしむ心情がうたわれたものである。また、なつかしさには「現実のつらい気分を忘れたり、過去のつらい記憶をポジティブに変化させ、幸せな気分を高める」「自尊心や自己肯定感を高める」など人を前向きにさせる効果が確認された。

それらの要素を備えている歌には、「故郷」「赤蜻蛉」「夕焼小焼」「朧月夜」「ちいさい秋みつけた」「まっかな秋」などが該当していた。

歌い継がれる要素として、「風景」「いのち」「なつかしさ」を導くことができた。しかし、これは、要素の一つにすぎないであろう。今後は、これ以外にも視野を広げること、また、音楽の面からの研究も必要であることも痛感している。

引用文献・参考文献・註

- 1) 全国大学音楽教育学会編著『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌 ―唱歌童謡140年の歩み』音楽之友社 2013年
- 2) 『日本のうたふるさとのうた100曲』講談社 1991年
- 3) 山住正巳著『子どもの歌を語る―唱歌と童謡―』岩波新書 1994年
- 4) 安田 寛著『「唱歌」という奇跡十二の物語 讃美歌と近代化の間で』文春新書 2003年
- 5) 山崎由美子「幼児の歌唱教材についての一考察 ―歌唱教材の分析・検討を通して―」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第4号1993年p.38～47
- 6) 齊木恭子『「児童文化」にみる子どもの音楽』『全国大学音楽教育学会研究紀要』第8号1997年p.88～97

- 7) 桶谷弘美「童謡と唱歌の本質とその相違について」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第10号1999年p.57～67
- 8) 桶谷弘美「島崎藤村と高野辰之に見る歌のふるさと」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第11号2000年p.37～48
- 9) 羽根田真弓「にほんのうたをめぐって」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第11号2000年p.78～88
- 10) 藤井浩基「大正童謡運動の国際的展開に関する一考察—朝鮮とアメリカの場合—」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第12号2002年p.86～94
- 11) 桶谷弘美「童謡と唱歌の本質とその相違について」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第10号1999年p.67
- 12) 羽根田真弓「にほんのうたをめぐって」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第11号2000年p.81
- 13) 『日本のうたふるさとのうた100曲』講談社1991年p.258
- 14) 『ママさんコーラス 私たちのレパートリー』①・②・③（音楽之友社1987年）、源田俊一郎編曲『女声合唱のための唱歌メドレー 故郷の四季』（カワイ出版2000年）、『おかあさんコーラスのためのレパートリー集 基本編』・『同応用編』（カワイ出版2003年）、源田俊一郎編曲『コーラスをはじめた人のための二部合唱曲集春よ、来い』（カワイ出版2006年）、柳田孝義編『アカペラ女声コーラスのための 唱歌のひびき』（音楽之友社2011年）、『楽しい合唱名曲集 合唱コンクールで唄いたいうた』（シンコーミュージック・エンタテイメント出版2012年）
- 15) 上笙一郎編『日本童謡辞典』東京堂出版 2005年 p.17
- 16) 長田弘著『なつかしい時間』岩波新書2015年 p.6～9「大切な風景」より
- 17) 内山 節著『いのちの場所』岩波書店 2015年 p.168
- 18) 内山 節著『いのちの場所』岩波書店 2015年 p.vi
- 19)、20) 長田弘著『なつかしい時間』岩波新書2015年p.8
- 21)、22) 上笙一郎編『日本童謡辞典』東京堂出版 2005年 p.195
- 23) 桶谷弘美著「童謡と唱歌の本質とその相違について」『全国大学教育学会』研究紀要第10号1990年 p.61
- 24) 楠見孝「なつかしさの心理学—記憶と感情、その意義」日本心理学会監修楠見孝編『なつかしさの心理学』誠信書房 2014年 p.1～22
- 25)、26) 同 p.2～3
- 27) 同 p.8～9
- 28) 同 p.20～21
- 29) 全国大学音楽教育学会編著『明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌 —唱歌童謡140年の歩み』音楽之友社 2013年 p.110～111
- 30) 同p.186～187
- 31) 同p.228～229
- 32) 2017.5.16、11:40取得。URL=<https://www.youtube.com/watch?v=Zr24ozl7RgM>

